


社会調査支援機構

チキ  ラボ

第4回 社会抑うつ度調査
2021年11月・2022年2月分析結果

目次

調査概要	3
------	---

- 調査方法
- 主な調査項目
- 回答者の特性

第1部. 人々の心理

(1) 精神的健康	7
-----------	---

- 抑うつ・不安感
- 孤独感・人生満足感
- 精神的健康：まとめ

(2) 不公平感	14
----------	----

- 調査項目
- 個人的不公平感の推移
- 社会的不公平感の推移
- 不公平感の推移：まとめ

第2部. コロナ禍の状況

(1) コロナ禍の活動	19
-------------	----

- 調査項目
- 外出／遊びに行った頻度
- 人との食事／旅行・イベント／外出の頻度
- コロナ禍の活動の推移：まとめ

(2) ワクチン接種状況	19
--------------	----

- ワクチン接種状況（年代別）
- 今後のワクチンに対する意欲（年代別）
- ワクチン接種状況：まとめ

第3部. その他の調査事項

(1) 年齢による差別	28
-------------	----

- 年齢が若いことを理由とした差別経験
- 年齢が若くないことを理由とした差別経験
- 年齢が若いことを理由とした不快な経験
- 年齢が若くないことを理由とした不快な経験
- 年齢による差別：まとめ

(2) 買い物に対する考え方	34
----------------	----

- 買い物に対する志向性の抽出
- 買い物に対する志向性の規定要因
- 買い物に対する志向性と精神的健康の関連
- 買い物に対する志向性：まとめ

引用文献	36
------	----

- (付録1) コロナ禍のリスク対策の質問項目
- (付録2) メディアに対する信用の因子分析

調査概要

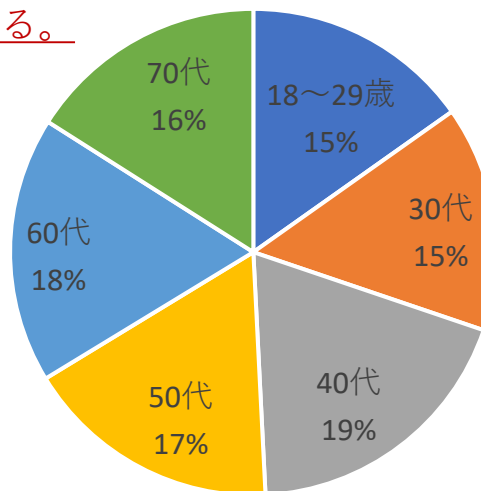
調査方法

- 調査方法：WEBアンケート
- 調査実施日：【6回目調査】2021年11月5日（金）～2021年11月9日（火）
【7回目調査】2022年2月4日（金）～2022年2月8日（火）
- 調査実施会社：株式会社ネオマーケティング
- 調査対象者：同会社のアンケートサイト「アイリサーチ」のモニター登録者のうち、18～79歳の男女。全国の地域・性別・年齢の人口分布（総務省統計局「人口推計」2018年10月1日現在人口（2019年4月12日発表），<http://www.stat.go.jp/data/jinsui/2018np/index.html>）に合わせて、調査対象者の割付を行った。調査に際し、サテイスフェイス検出項目を2問設け、いずれの質問にも指示通り回答した人のみを有効回答とした。
- 有効回答数：各調査回につき1000名

※ 2021年11月までは毎月、それ以降は3か月に1回調査を実施している。

回答者の性別・年齢

- 各月につき男性 496人（49.6%）・女性 504人（50.4%）
- 【6回目調査】50.7歳（SD = 16.23）
【7回目調査】50.1歳（SD = 15.99）



回答者の年齢分布

主な調査項目

1. 人々の心理

- (1) 精神的健康
 - 抑うつ：PHQ-9（村松, 2014）を使用
 - 不安障害：GAD=7（村松, 2014）を使用
 - 孤独感：3項目孤独感尺度（Igarashi, 2019）を使用
 - 人生満足度：SWLS（角野, 1995）
- (2) 不公平感 社会から公平に扱われていないと思う経験、社会に対する公平感

2. コロナ禍の状況

- (1) コロナ禍の活動 コロナ禍での活動・リスク対策行動・
- (2) ワクチン接種状況 ワクチンの接種状況・今後のワクチン接種への意欲

3. その他の調査項目

- (1) 年齢による差別経験 年齢を理由に不利な扱いを受けた／不快な思いをしたことがあるか
- (2) 買い物に対する考え 買い物をする際の意識や行動
- (3) メディアへの信用 テレビ、新聞、SNS等、様々なメディアを信用している度合い

4. 基本属性

- 性別・年齢・就労状況・婚姻状況・同居家族・主観的健康状態・出身学校・昨年と比べた暮らし向き・世帯収入・主観的社会階層・性格特性など

1（人々の心理）、2（コロナ禍の状況）、4（基本属性）については毎回の調査で質問紙し、推移を観測している。3（その他の調査項目）については調査ごとに異なる。

回答者の特性

特性	項目	割合 (%)	
		第6回調査	第7回調査
現在の就労状況	現在仕事をしている（通学の傍らのアルバイト等を含む）	60.5	60.2
	していない（育児休業等、一時的な休業を含む）	39.5	39.8
雇用形態 ※ 休業中の人は休業前の 就労形態	正規雇用／会社や団体の役員／自営業	36.5	39.2
	非正規雇用（派遣・契約社員／パート・アルバイト）	23.2	20.5
	仕事をしていない（育児休業等、一時的な休業を除く）	38.7	38.8
	その他	1.6	1.5
婚姻状態	現在結婚している	56.6	56.4
	離婚した	5.8	7.2
	死別した	2.7	3.0
	結婚したことはない	34.9	33.4
通学の有無	現在通学している（学生である）	4.2	2.6
	通学していない（学生ではない）	95.8	97.4
出身学校	中学／高校	32.9	35.8
	高専／短大／専門学校	20.8	20.3
	大学／大学院	46.3	43.9
世帯年収	200万未満	10.2	11.5
	200-400万	22.0	21.3
	400-600万	20.0	19.1
	600-800万	14.6	12.5
	800-1000万	6.5	8.8
	10000万-1200万	4.0	3.9
	1200万以上	4.5	6.5
	わからない・答えたくない	18.2	16.4
昨年と比べた暮らし 向き	かなり良くなった	0.6	1.4
	やや良くなった	3.2	3.2
	変わらない	73.1	71.6
	やや悪くなった	17.8	17.8
	かなり悪くなった	5.3	6.0

第1部 人々の心理

(1) 精神的健康

精神的健康の推移

精神的健康

- 抑うつ：PHQ-9（村松, 2014）を使用
- 不安障害：GAD=7（村松, 2014）を使用 ⇒ 中度以上の人の割合を指標とした
- 孤独感：3項目孤独感尺度（Igarashi, 2019）を使用
- 人生満足度：SWLS（角野, 1995） ⇒ 平均値を指標とした

本資料の図は、2021年6月からチキラボが実施している調査データに、早稲田大学政治経済学術院の上田准教授からご提供いただいた2020年4月～2021年2月のデータを追加して作成したものです。図は、下記論文に掲載された図（2020年4月～2020年10月のデータを使用）に基づいています。（人生満足度については、2021年6月から調査を開始したため、それ以前のデータはありません）

2021年2月までのデータは今回調査とは調査方法が異なるため、一概に比較はできません。

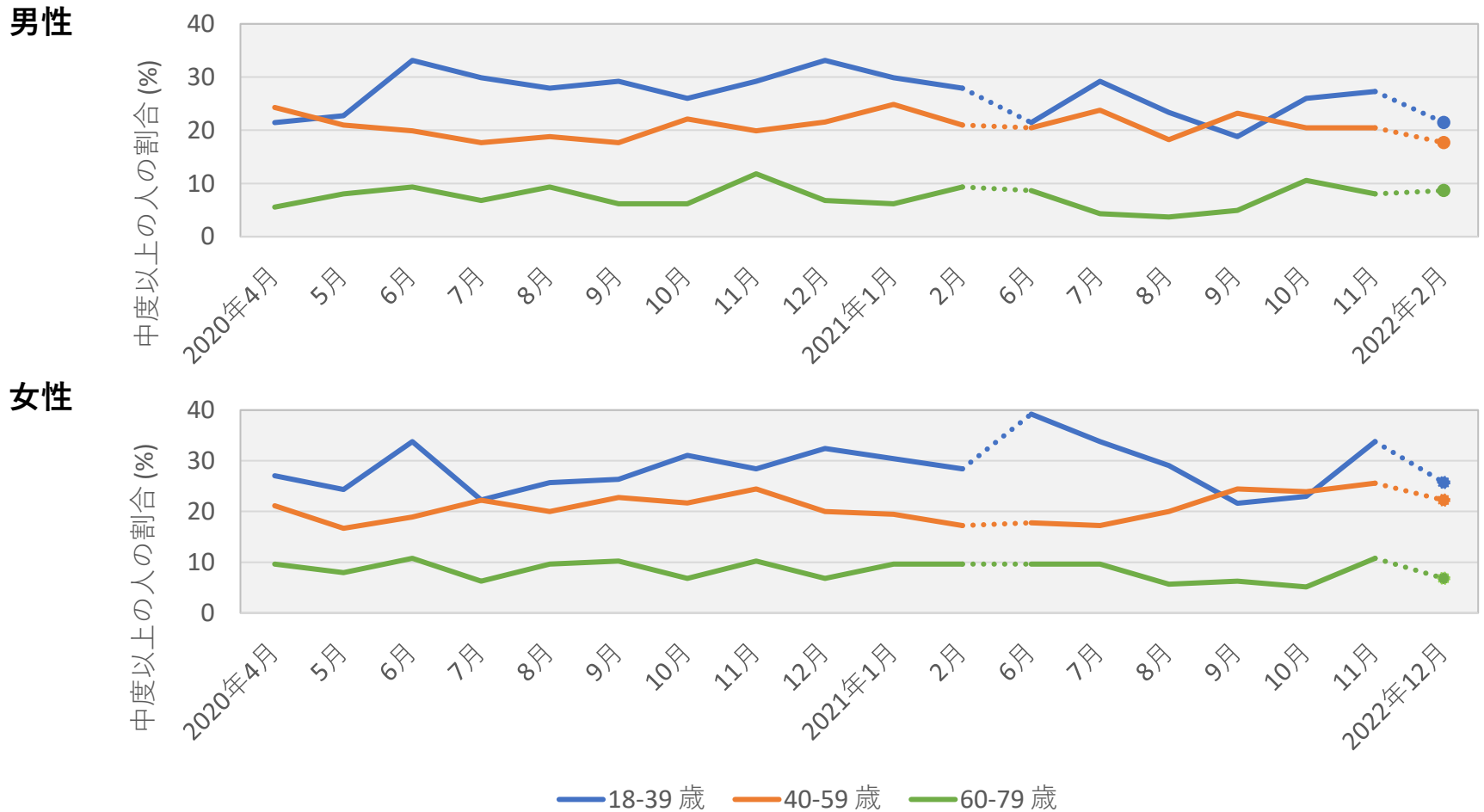
しかし、調査対象者の性別・年齢・居住地等の割付条件は本調査と同じであり、人々の精神的健康の長期的な変遷について、ある程度の比較は可能だと考えています。

【出典】

Michiko Ueda, Robert Nordström, Tetsuya Matsubayashi (2021). Suicide and mental health during the COVID-19 pandemic in Japan, Journal of Public Health, fdab113, <https://doi.org/10.1093/pubmed/fdab113>.

抑うつの推移

※ 抑うつが中度以上の人の割合

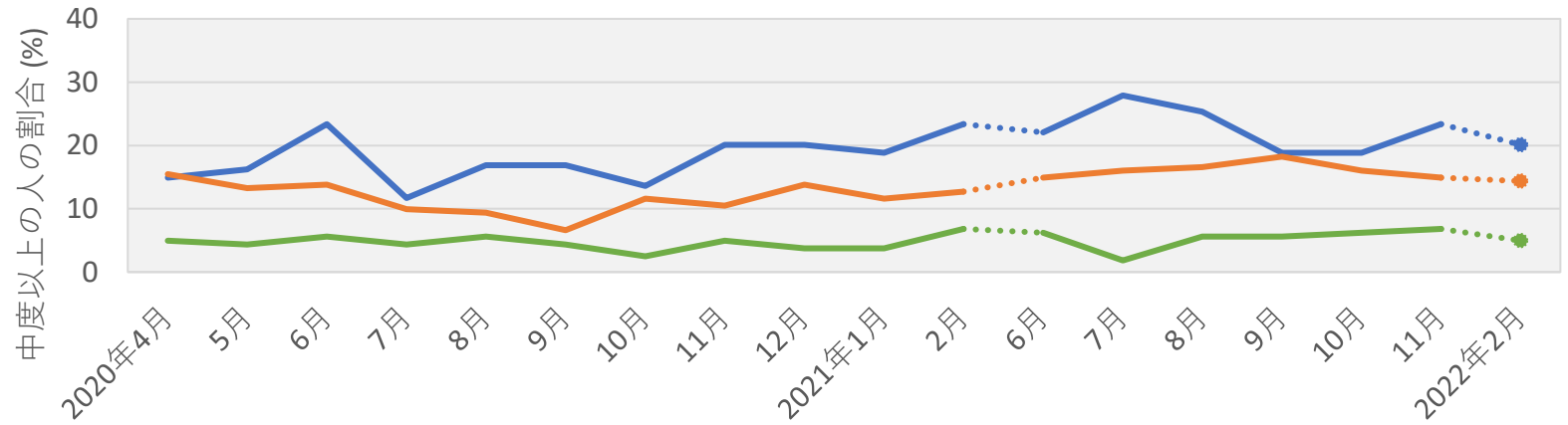


- これまでと同様、若年層（18-39歳）中年層（40-59歳）で、高齢層（60-79歳）に比べて抑うつの高い人が多い傾向が見られた。

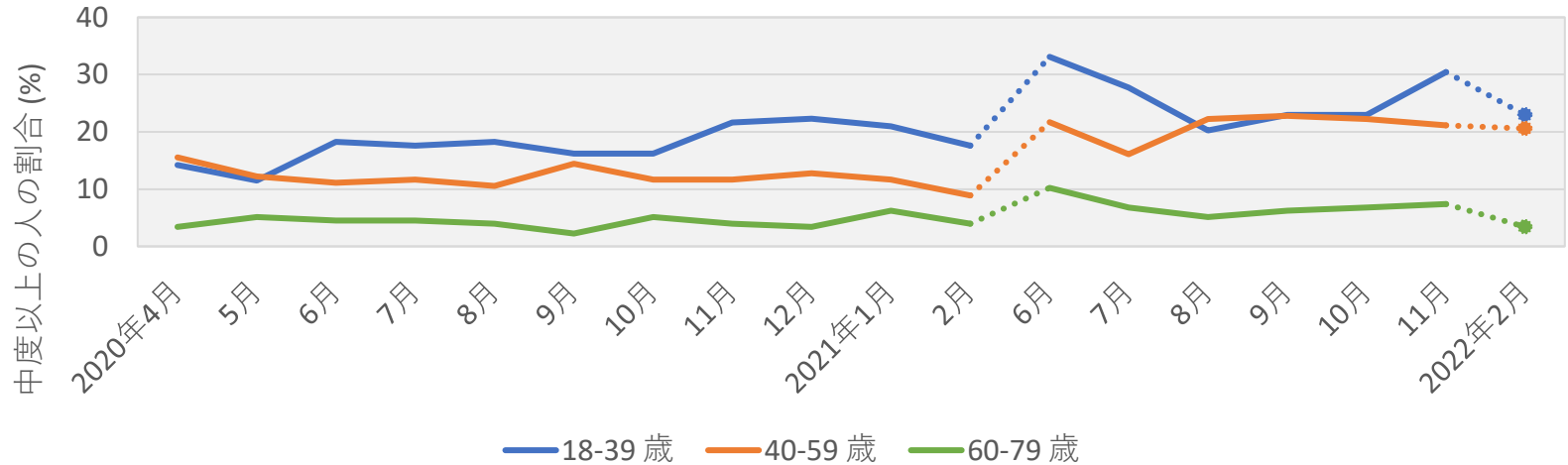
不安感の推移

※ 不安感が中度以上の人の割合

男性



女性

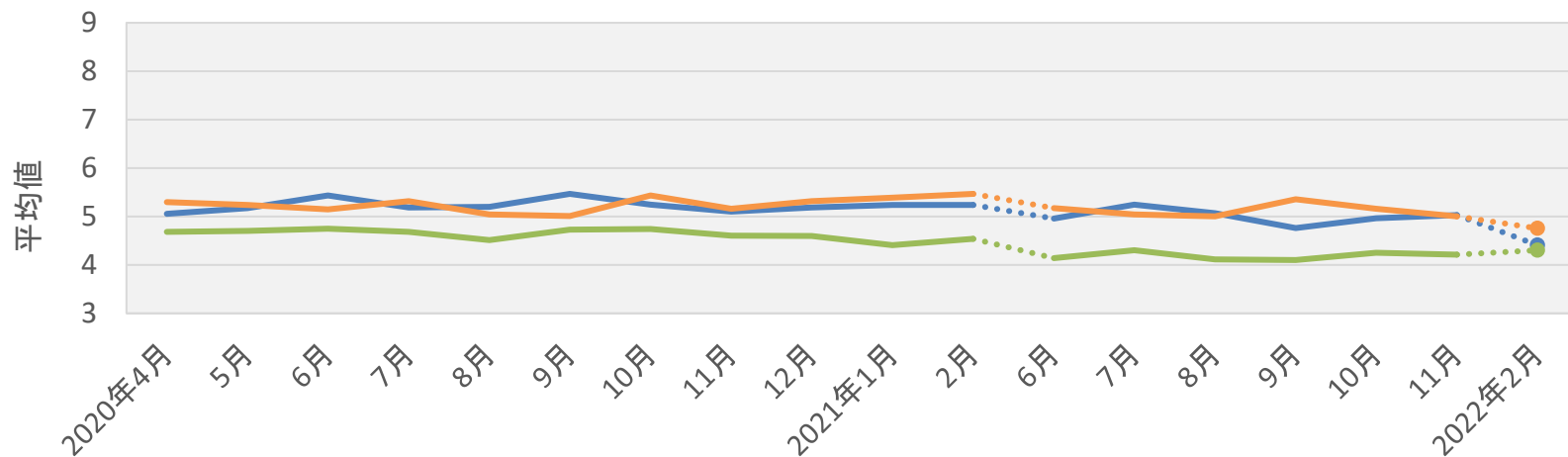


- 若年層・中年層・高齢層の順に不安感の高い人が多かったが、2021年8月以降、中年層（40-59歳）の女性で不安感の高い人が若年層と同程度に多い傾向が続いている。

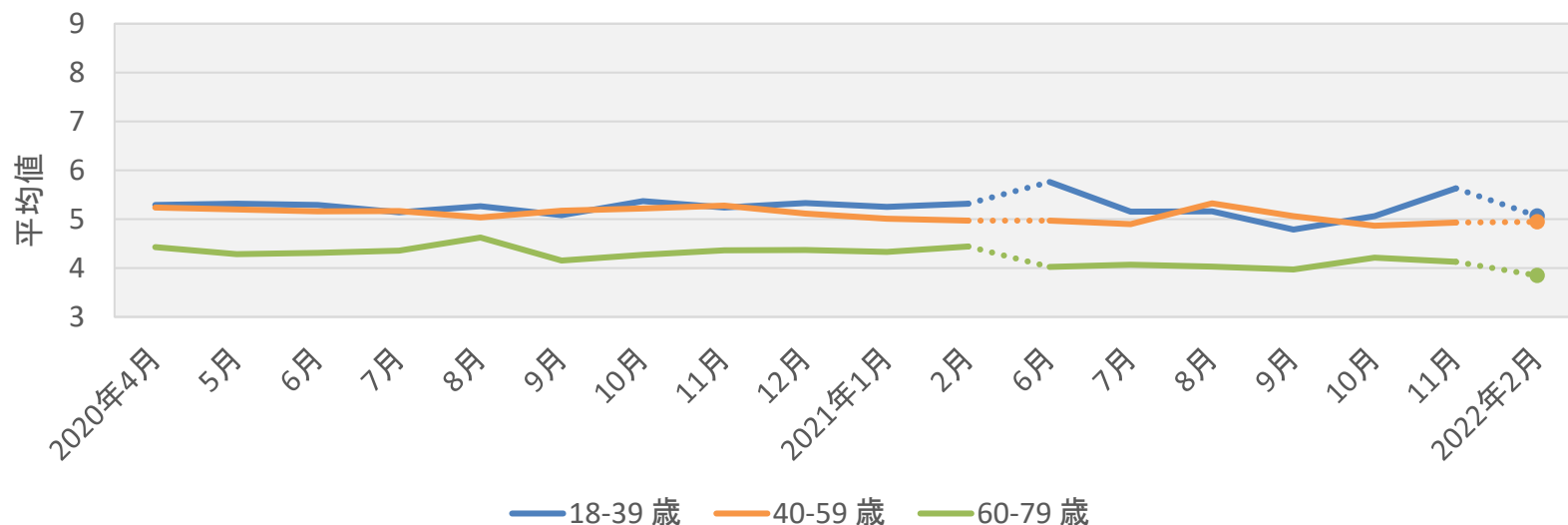
孤独感の推移

※ 孤独感の平均値

男性



女性

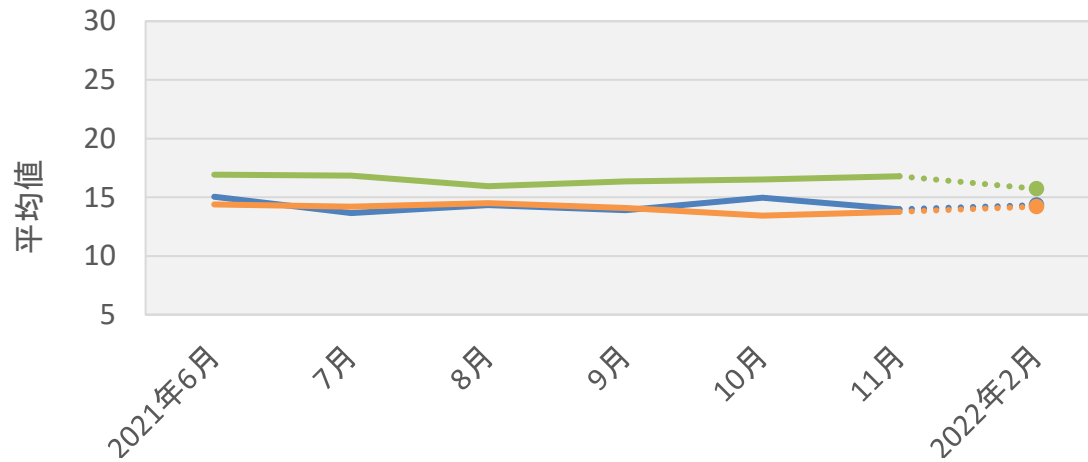


- これまでと同様、若年・中年層の孤独感が、高齢層（60-79歳）より高かった。
- 2022年2月調査では、若年層の孤独感が男女ともに低下していた。

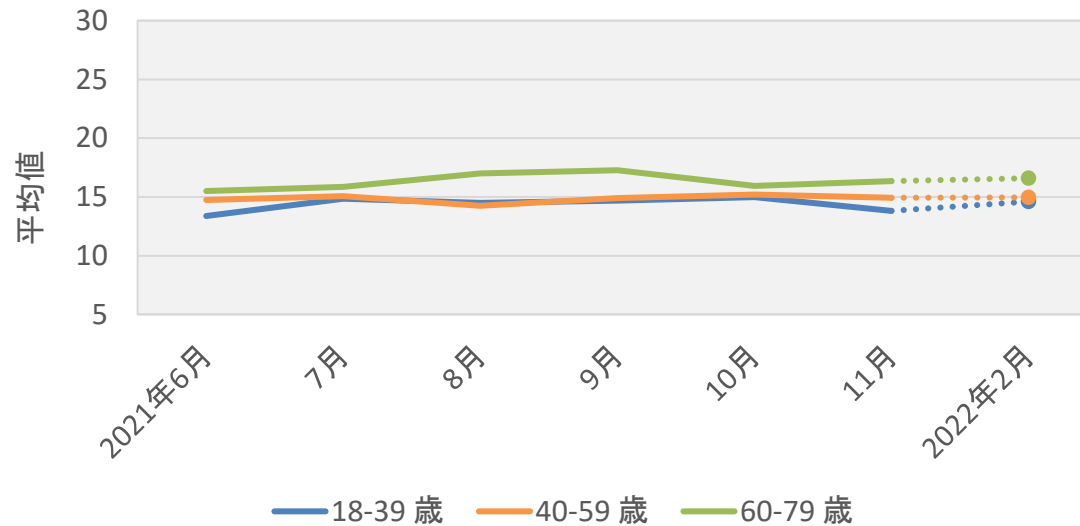
人生満足感の推移

※ 人生満足感の平均値

男性



女性



※ 人生満足感については、2021年6月から調査を開始したため、それ以前のデータはありません。

- 図からは性・年齢による違いがわかりにくいですが、統計的には、2021年11月・2022年2月のいずれの調査でも、若年層・中年層のほうが、高齢層よりも人生満足感が低かった。

※ 人生満足感を従属変数、性・年齢を独立変数とした分散分析の結果

精神的健康：まとめ

- 調査開始時から一貫して、若年層（18-39歳）、中年層（40-59歳）、高年層（60-79歳）の順に精神的健康状態が悪い傾向が見られており、2021年8月以降は、若年層と中年層の差が縮まっている。
- ⇒ 高齢者の健康状態に注意が向きがちであるが、精神的健康に関しては、むしろ、若年層・中年層に注意していく必要がある。

- 精神的健康の変遷については、全体として、大きな変化はなかった。
- むしろ、2022年2月調査では若年層の孤独感が低下している傾向が見られた。
- 前回調査（2021年10月）では、高齢男性（60-79歳）で抑うつの高い人が増加していたが、今回の調査からはそのような結果は見られなかったため、一時的な傾向だったと考えられる。
- ⇒ 2022年1月からの新型コロナウイルス感染者の増加（第6派）にも関わらず、人々の精神的健康状態は悪化していなかった。

(2) 不公平感

不公平感：調査項目

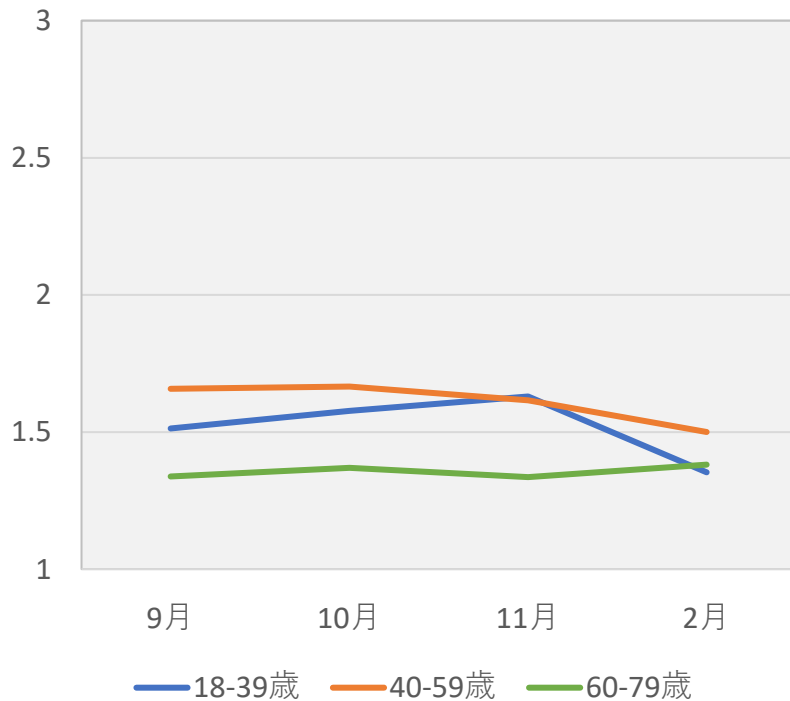
自分自身が公平な扱いを受けていないと感じる「個人的不公平感」、社会が公平な場でないと感じる「社会的不公平感」の変数を、各2項目の平均をとって作成した。

変数	項目
個人的不公平感	自分自身が公平な扱いを受けていないと感じることがありますか
	自分と同じ世代・性別の人々は公平な扱いを受けていないと感じることはありますか
社会的不公平感	日本社会は公平な場でないと感じることはありますか
	世界は公平な場でないと感じることがありますか

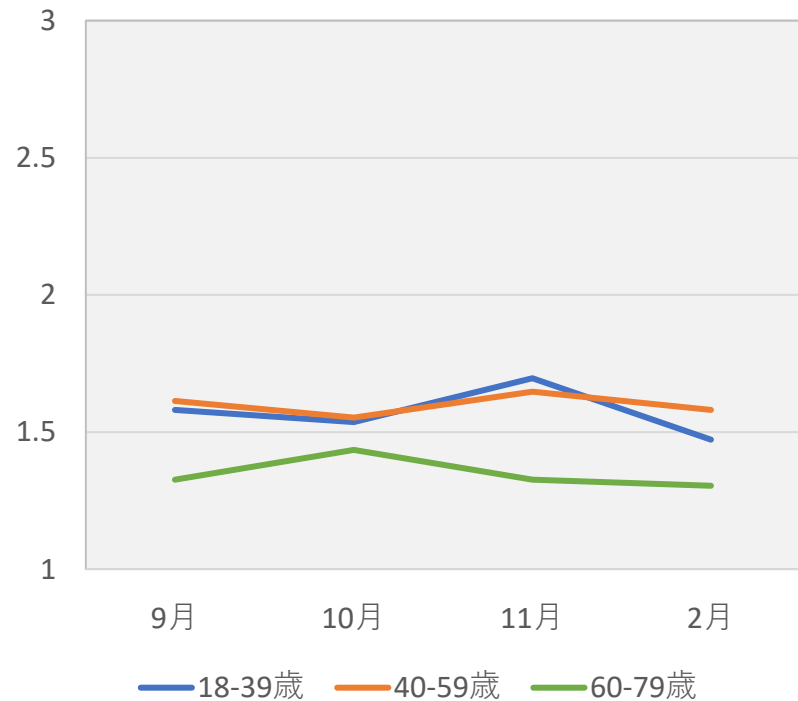
※ 項目間相関については第3回報告書を参照

個人的不公平感の推移（性・年齢別）

男性



女性



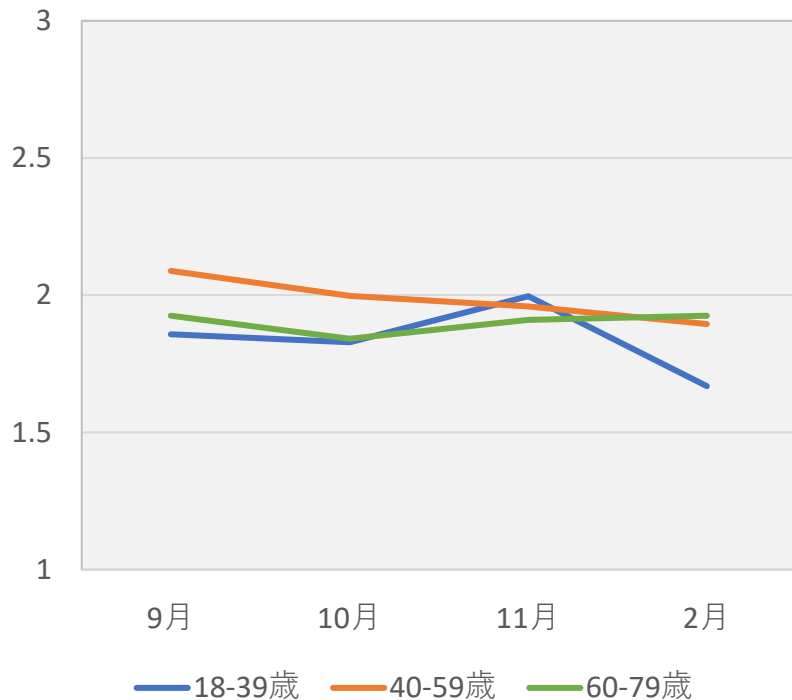
- 個人的不公平感は、中年層（40-59歳）、若年層（18-39歳）、高齢層（60-79歳）の順に高かった。a)
- 若年層の個人的不公平感は、男女とも、2021年10・11月で高く、2022年2月で低かった。b)
- 中年層・高齢層の個人的不公平感は、月による差はなかった。b)

a) 個人的不公平感を従属変数、性別・年齢を独立変数とした分散分析の結果。

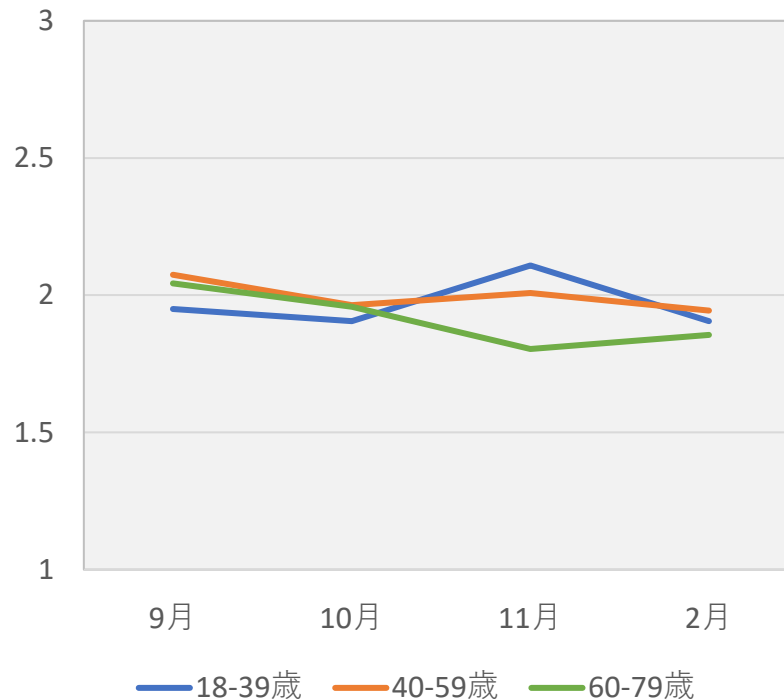
b) 性・年齢別に、個人的不公平感を従属変数、調査月を独立変数とした分散分析の結果。

社会的不公平感の推移（性・年齢別）

男性



女性



- 社会的不公平感は、中年層（40-59歳）が、若年層（18-39歳）・高齢層（60-79歳）に比べて高かった。 a)
- 若年男性の社会的不公平感は、11月に高く、2月に低かった。 b)
- 高齢女性の社会的不公平感は、9月に高く、2月に低かった。 b)

a) 個人的不公平感を従属変数、性別・年齢を独立変数とした分散分析の結果。

b) 性・年齢別に、個人的不公平感を従属変数、調査月を独立変数とした分散分析の結果。

不公平感の推移：まとめ

- 性・年齢別に見ると、中年層（40-59歳）の不公平感が強く、調査月による差もなかった。
 - ⇒ 中年層は仕事・家庭で責任の多い時期であるとともに、40歳代には就職氷河期世代が含まれるため、不公平感が高くなったと考えられるとともに、
 - ⇒ また、中年層の不公平感は、調査月やコロナ対策などの一時的な状況の影響を受けにくいと考えられる。
- 若年層（特に若年男性）の不公平感は、2022年2月時点で、それ以前に比べて低下していた。
 - ⇒ 若年層は他の年代に比べて、遊びや外出などを活発に行いたい世代だと考えられる。10月の非常事態宣言の解除から1月末のまん延防止等重点措置発令の間で、比較的自由に活動できる期間が長かったため、若年層の不公平感が減少したのではないか。

第2部 コロナ禍の状況

(1) コロナ禍の活動

コロナ禍における活動：調査項目

赤字の項目について、調査月による差が見られた。a)

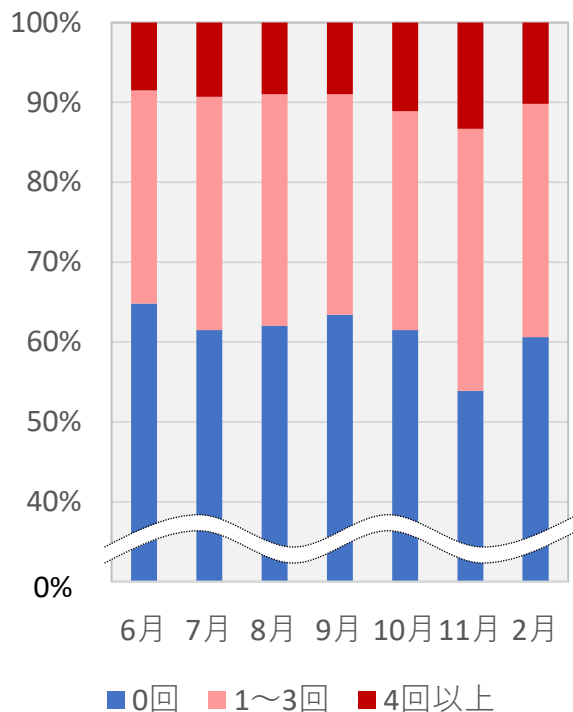
活動の種類	項目
外食	同居している人と外食した
	同居していない人を含む2～4人で外食した
	同居していない人を含む5人以上のグループで外食した
遊び	同居している人と遊びに行った
	同居していない人を含む2～4人で遊びに行った
人との食事	同居していない人を含む5人以上のグループで遊びに行った
	リモート飲み会などで友人と話した
	自宅や友人宅などで「家飲み」や食事会を行なった
イベント・旅行	職場の同僚などと、職場で弁当や社食を共に食べた
	コンサートやライブなどのイベントに行った
	カラオケに行った
外出	旅行に行った（地元への帰省も含みます）
	家の外に出かけた（理由はなんでもかまいません）
	電車やバスなどの公共交通機関を利用した
PCR検査	混雑した電車やバスに乗った
	民間で行なっているPCR検査を受けた

a) 各項目への回答を従属変数、調査月を独立変数としたカイ二乗分析を行った。活動の種類ごとにHolm法にて有意水準を調整した。

外食／遊びに行った頻度 a)

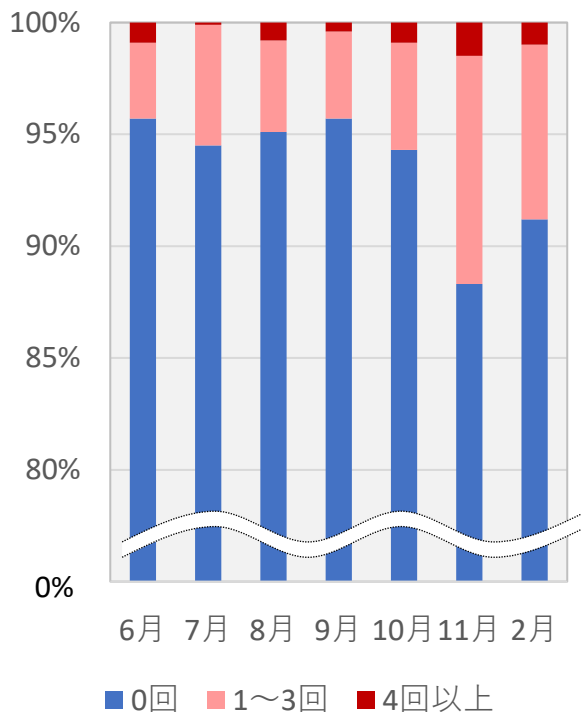
※ 代表的な項目を抜粋

同居している人との外食



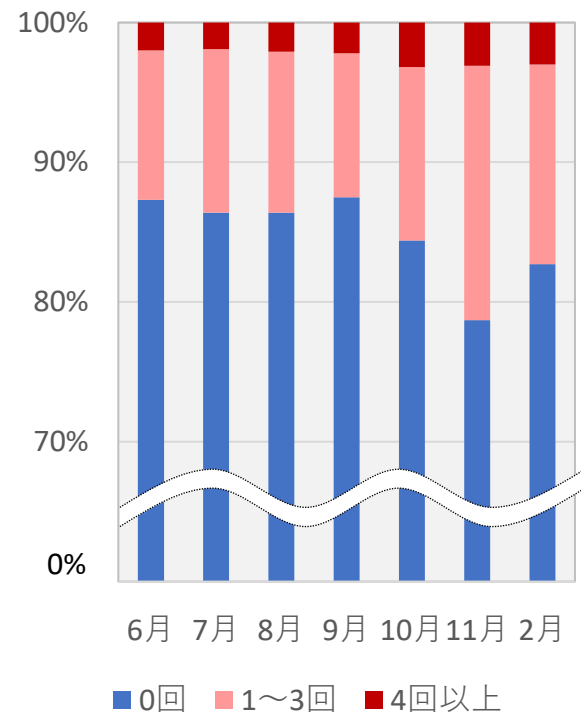
2021年11月は他の月に比べて0回の人少なく、それ以外（1~3回、4回以上）の人が多かった。b)

非同居人を含む5人以上の外食



2021年11月、2022年2月ともに、0回の人少なく、1~3回の人が多かった。（11月は4回以上の人も有意に多かった）b)

非同居人を含む2-4人での遊び



2021年11月、2022年2月共に、それ以前に比べて0回の人少なかった。b)

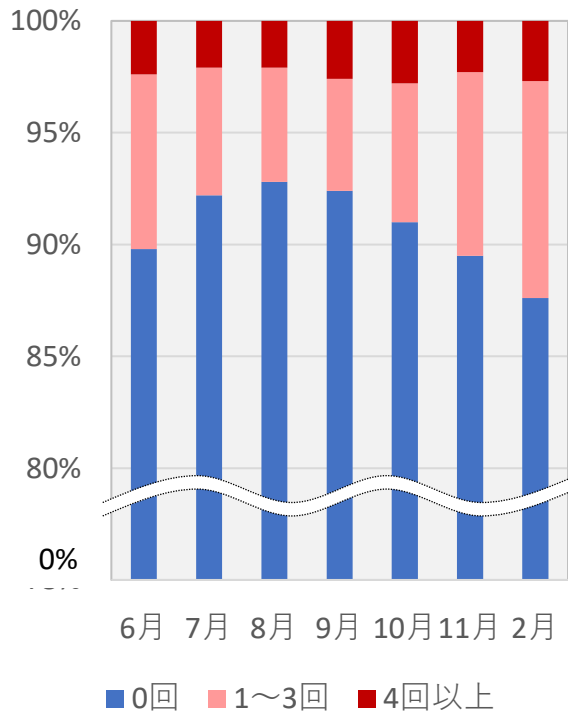
- 「同居していない人を含む2~4人以上の外食」「同居している人との遊び」（図は略）についても、同様に、2021年11月以降、それ以前と比べて活動頻度が増加していた。

a) 各項目への回答を従属変数、調査月を独立変数としたカイ二乗分析。Holm法にて有意水準を調整した。 b) 残差分析の結果。

人との食事／イベント・旅行／外出の頻度^{a)}

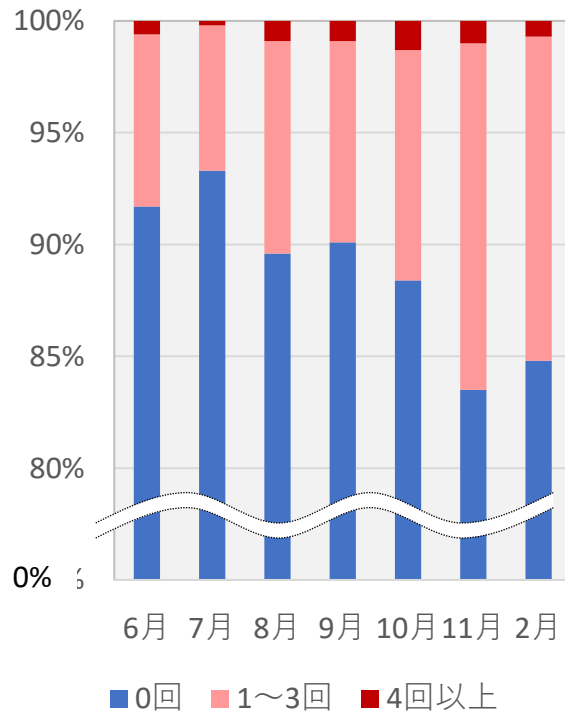
※ 代表的な項目を抜粋

自宅等での「家飲み」や食事会



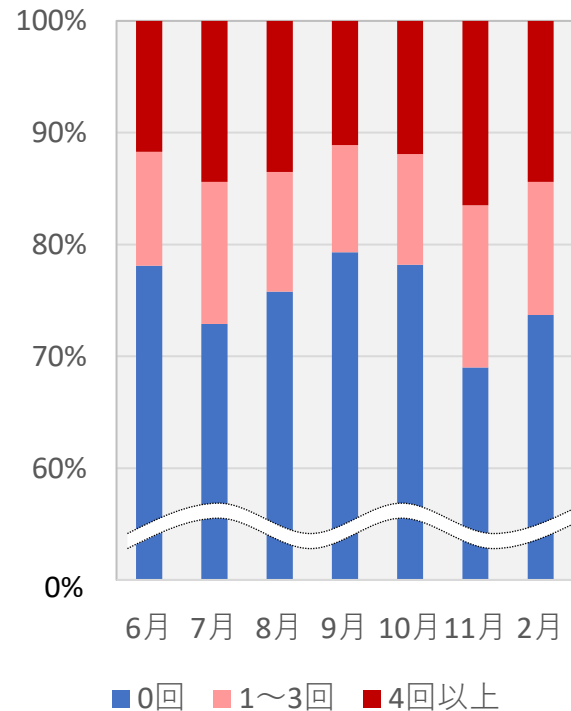
2022年2月は他の月に比べて0回の人が少ない、1~3回の人が多かった。^{b)}

旅行に行った（帰省を含む）



2021年11月、2022年2月に、それ以前に比べて0回の人が少ない、1~3回の人が多かった。^{b)}

混雑した電車やバスに乗った



2021年11月は、他の月に比べて0回の人が少ない、それ以外（1~3回、4回以上）の人が多かった。^{b)}

- 「職場の人との食事」「カラオケ」「公共交通機関の利用」（図は略）についても、2021年11月以降、それ以前と比べて活動頻度が増加していた。（交通機関の利用は右端図と同様11月のみ多かった）

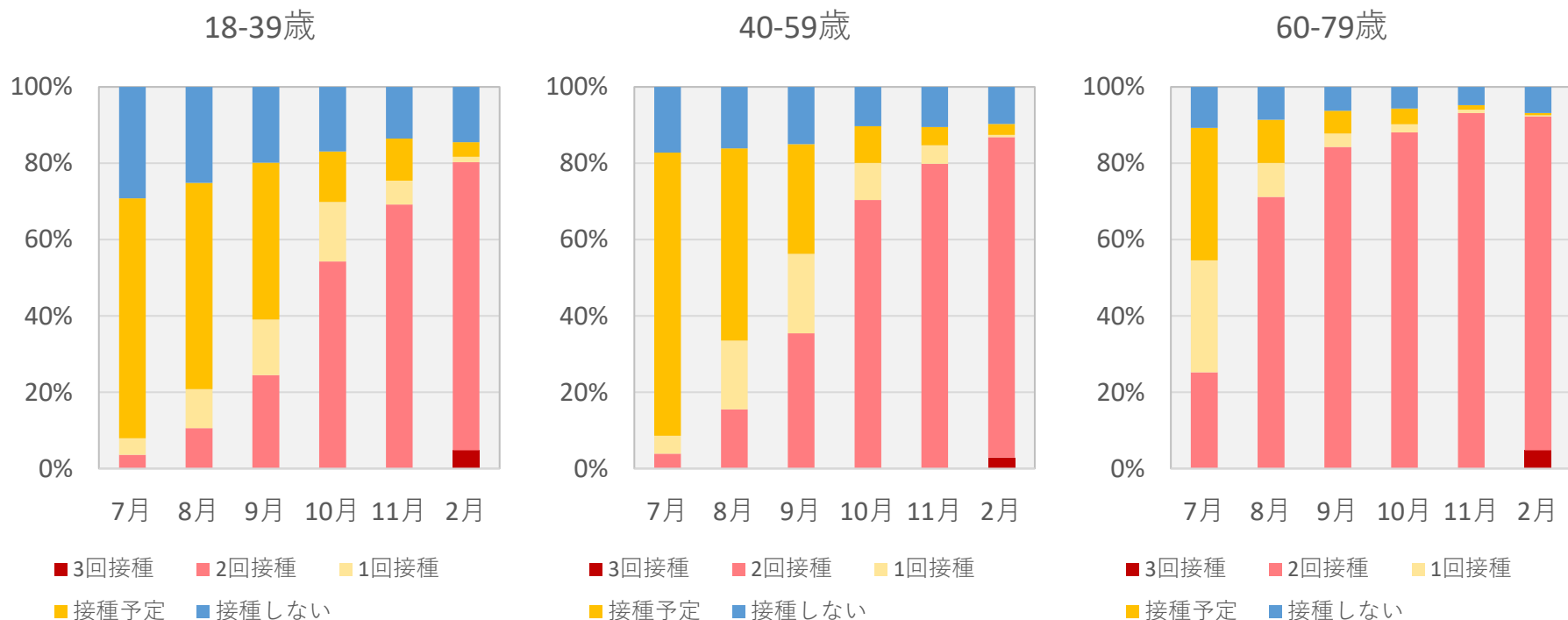
a) 各項目への回答を従属変数、調査月を独立変数としたカイ二乗分析。Holm法にて有意水準を調整した。 b) 残差分析の結果。

コロナ禍の活動：まとめ

- コロナ禍の活動に関するほとんどの項目で、活動をした人の絶対数は少ないものの、**2021年10月以前と比べて活動が活発化していた**。特に**2021年11月には多くの活動が活発になっていた**。
 - ⇒ **2021年10月に非常事態宣言が解除され、2022年1月末にまん延防止等重点措置が発令されるまでの期間が調査期間であったため、比較的活発に活動していた**。なお、**2月調査で11月調査より活動頻度が上がったのは、1月末にまん延防止等重点措置が発令されたためだと考えられる**。
 - ⇒ **非常事態宣言の影響だけでなく、活動自粛の長期化による限界や、気のゆるみ等が表われている可能性もある**。
 - ⇒ **非常事態宣言やまん延防止等重点措置が人々の行動に影響を与えており、これらの宣言が感染症対策として意味があるものであると考えられる一方で、人々の間には、コロナ前のような活動の再開を求める気持ちが高まっていることが示唆され、活動自粛のみに頼らない感染症対策が望まれる**。
- 一方、別の項目（付録1）でたずねたコロナ禍のリスク対策行動（「出かけるときはマスクをつけた」「人との間隔をできるだけ空けた」等）については、**2021年10月以前と11月以降で有意な差はなかった**。
 - ※ 「イソジンなどのうがいぐすりでうがいをした」のみ**2022年2月に有意に増加していたが、これは必ずしもコロナ対策のためではなく、冬になっての風邪やインフルエンザ対策と考えられる**。
- ⇒ **活動が活発になっても、リスク対策そのものが緩んでいるわけではないと言える**。
- ⇒ **リスク対策は既に生活に根付いたものになっており、活動が再開しても、リスク対策を継続できる可能性が高いことが示唆される**。

(2) ワクチン接種状況

ワクチン接種状況の推移（年代別） a)

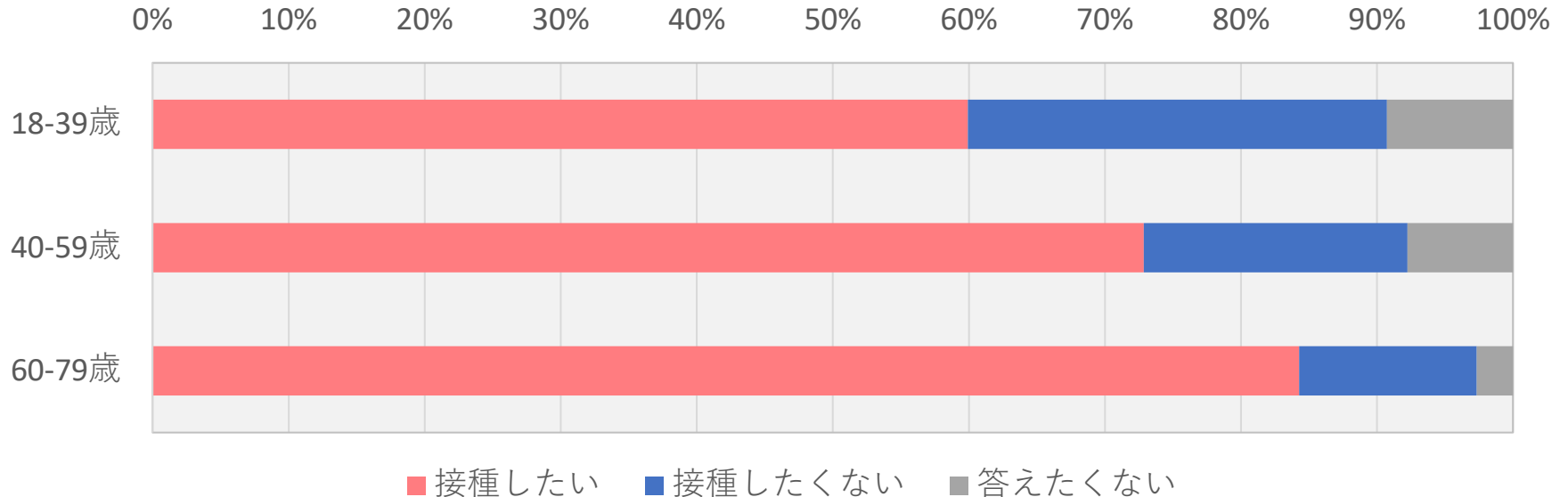


- 若年層（18-39歳）のワクチン接種状況がやや遅れていたが、2022年2月の時点では約8割の人が2回目の接種を済ませており、接種したくてもできない人は約5%と少数である。
- 高齢層（60-79歳）では2022年2月の時点で約9割の人が2回目の接種を済ませ、接種したくてもできない人は1.5%と、ワクチン接種が進んだ。
- 2022年2月の時点で、いずれの年代においても、5%程度の人、3回目のワクチン接種を済ませていた。

a) 2021年11月以降の調査では、ワクチン接種状況について「答えたくない」の選択肢を増やした。

今後のワクチン接種に対する意欲（年代別） a)

今後、新型コロナウイルスのワクチンを接種する機会があれば、接種したいですか



- いずれの年代でも、半分以上の人がワクチン接種をしたいと答えていた。
- 高齢層（60-79歳）、中年層（40-59歳）、若年層（18-39歳）の順に、ワクチンの接種に意欲を持っていた。
- 中年層、若年層では、1割程度の人が「答えたくない」と回答しており、ワクチン接種に対する考え方を答えることがデリケートな問題となっていることが推測される。

ワクチン接種状況：まとめ

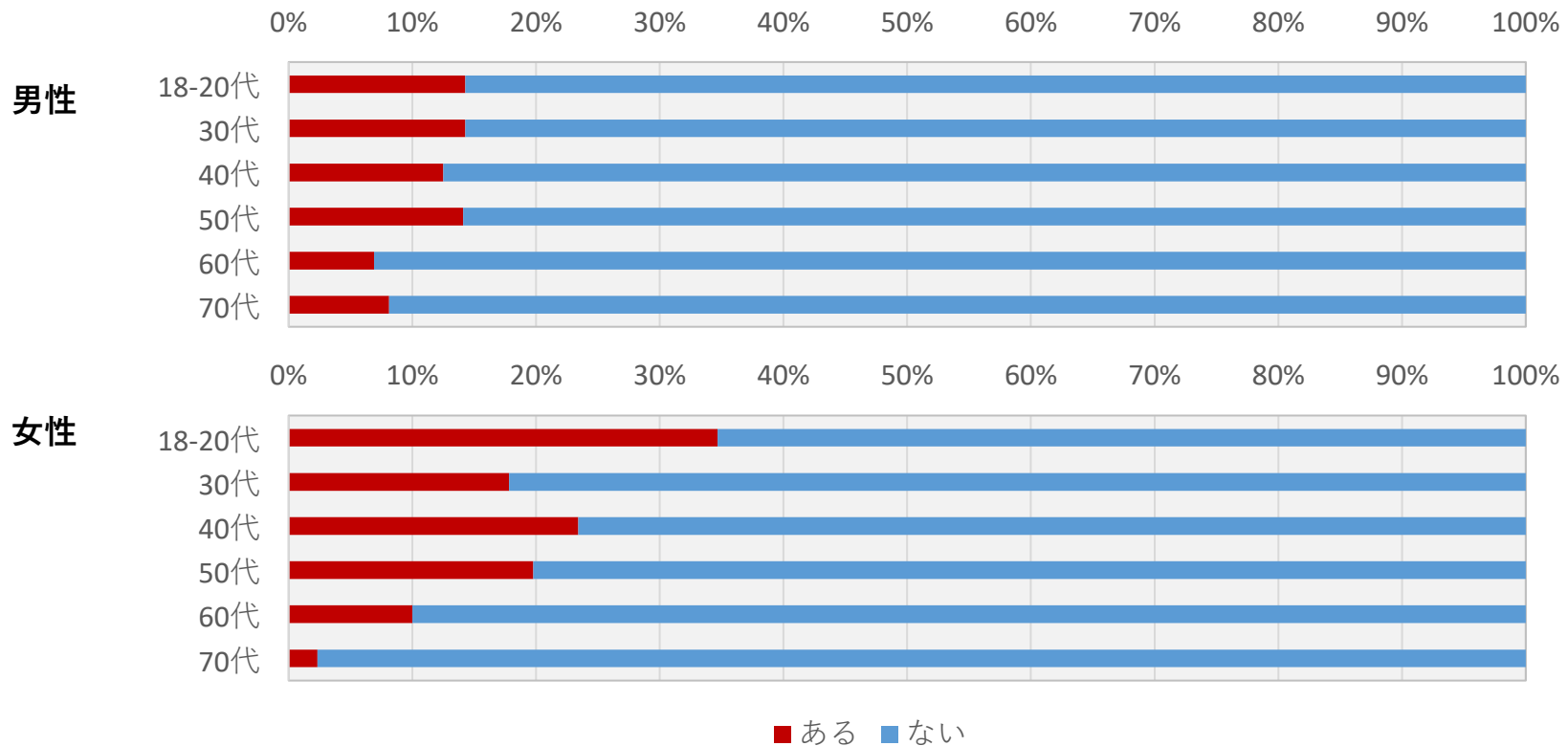
- 2022年2月時点で、8割以上の人が2回目までのワクチン接種を行っていた。
 - 2022年2月時点で3回目の接種をした人は、年代に関わらず5%程度であった。
 - 今後もワクチンを接種したいという人は、全ての年代で6割以上、特に高齢層では8割以上であった。
- ⇒ 全ての年代において、2回目までのワクチン接種は順調に進んでいると言える。
- ⇒ 3回目接種は調査時点でまだあまり進んおらず、またワクチン接種意欲の高い高齢者が優先的に接種できているとは言えない状況である。今後の増加が望まれる。
- ワクチン接種についての考え方を「答えたくない」と言う人は1割程度存在した。
- ⇒ ワクチン接種に対する考え方は人によって大きく異なるため、表明することが微妙な問題になっている可能性がある。

第3部 その他の調査事項

(1) 年齢による差別

年齢が若いことを理由とした差別経験（性・年齢別）

年齢が若いことを理由に不利な扱いを受けたことがあるか



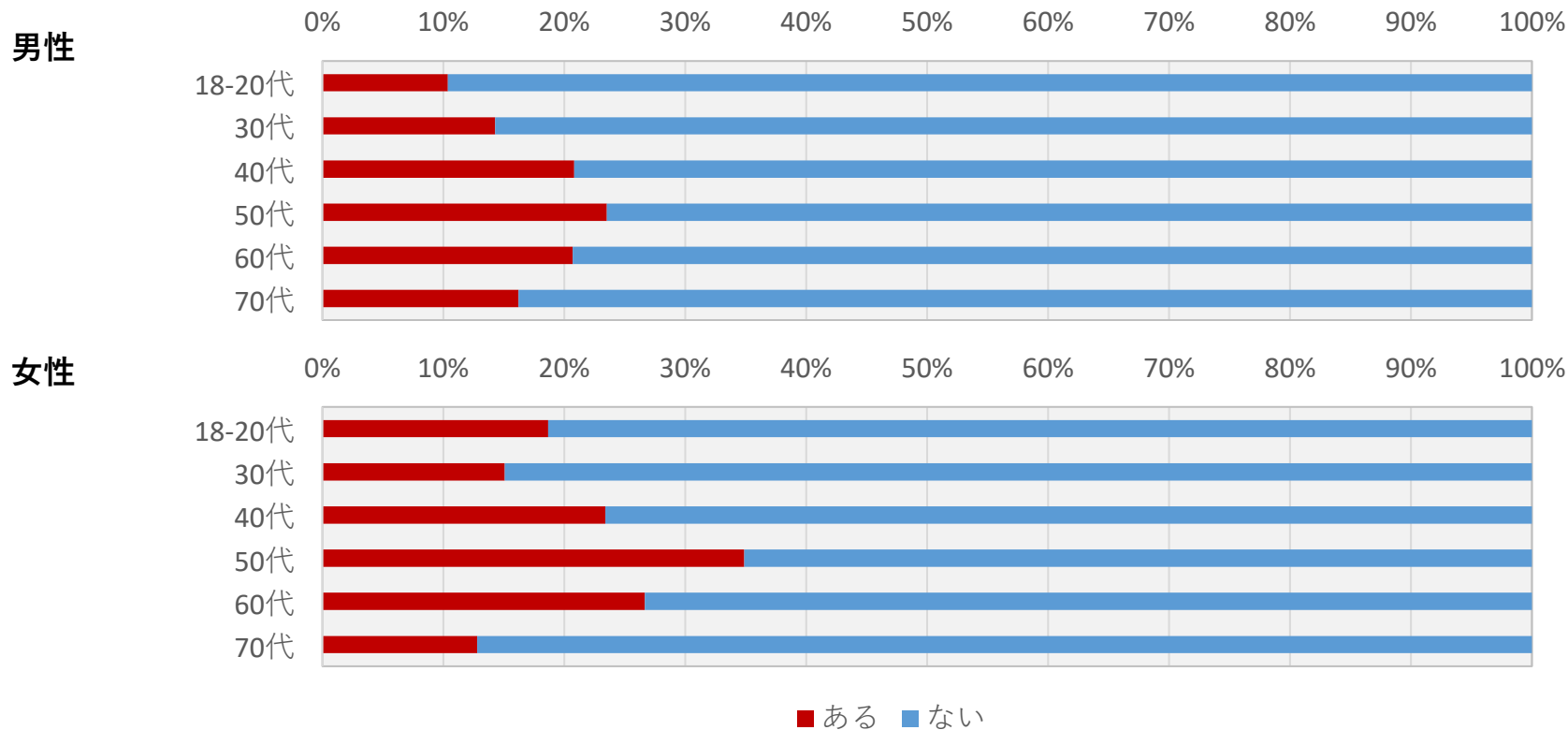
- 年齢が若いことによる不利な扱いを受けたことがある人は、女性の方が多かった。
- 不利な扱いを受けた人は、女性は18-20代で多く、60代・70代で少なかったが、男性は年齢による差がなかった。 a) b)

a) 「よくある」「たまにある」を「ある」、「ほとんどない」を「ない」として集計した。

b) 性・年齢別に、経験の有無を従属変数、年代を独立変数とした χ^2 検定および残差分析を行った。

年齢が若くないことを理由とした差別経験（性・年齢別）

年齢が若くないことを理由に不利な扱いを受けたことがあるか



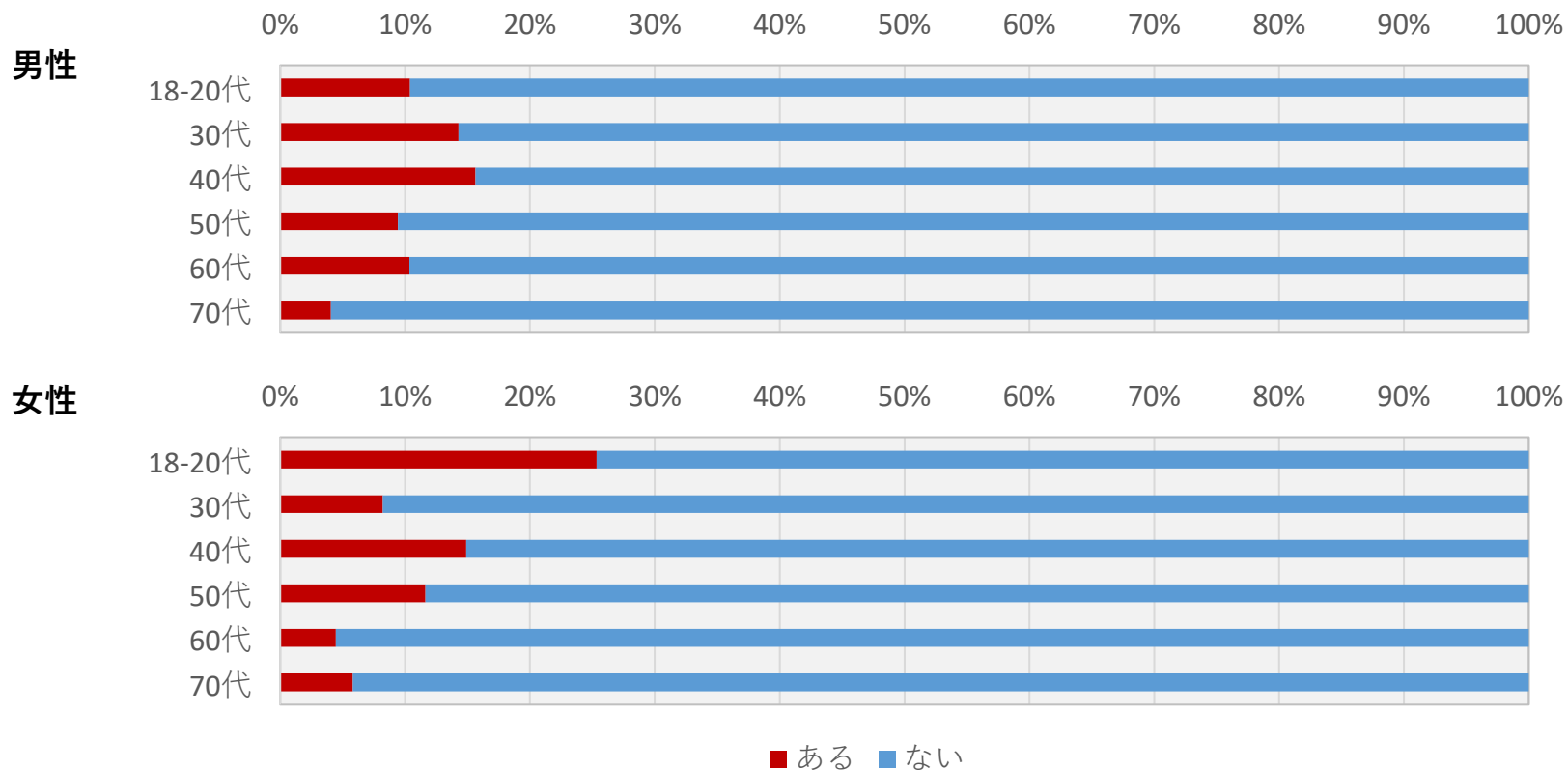
- 年齢が若くないことによる不利な扱いを受けたことがある人の割合は、男女で差はなかった。
- 不利な扱いを受けた人は、女性は50代で多く、70代で少なかったが、男性は年齢による差がなかった。 a) b)

a) 「よくある」「たまにある」を「ある」、「ほとんどない」を「ない」として集計した。

b) 性・年齢別に、経験の有無を従属変数、年代を独立変数とした χ^2 検定および残差分析を行った。

年齢が若いことを理由とした不快経験（性・年齢別）

年齢が若いことをバカにされたり、からかわれたりしたことがあるか



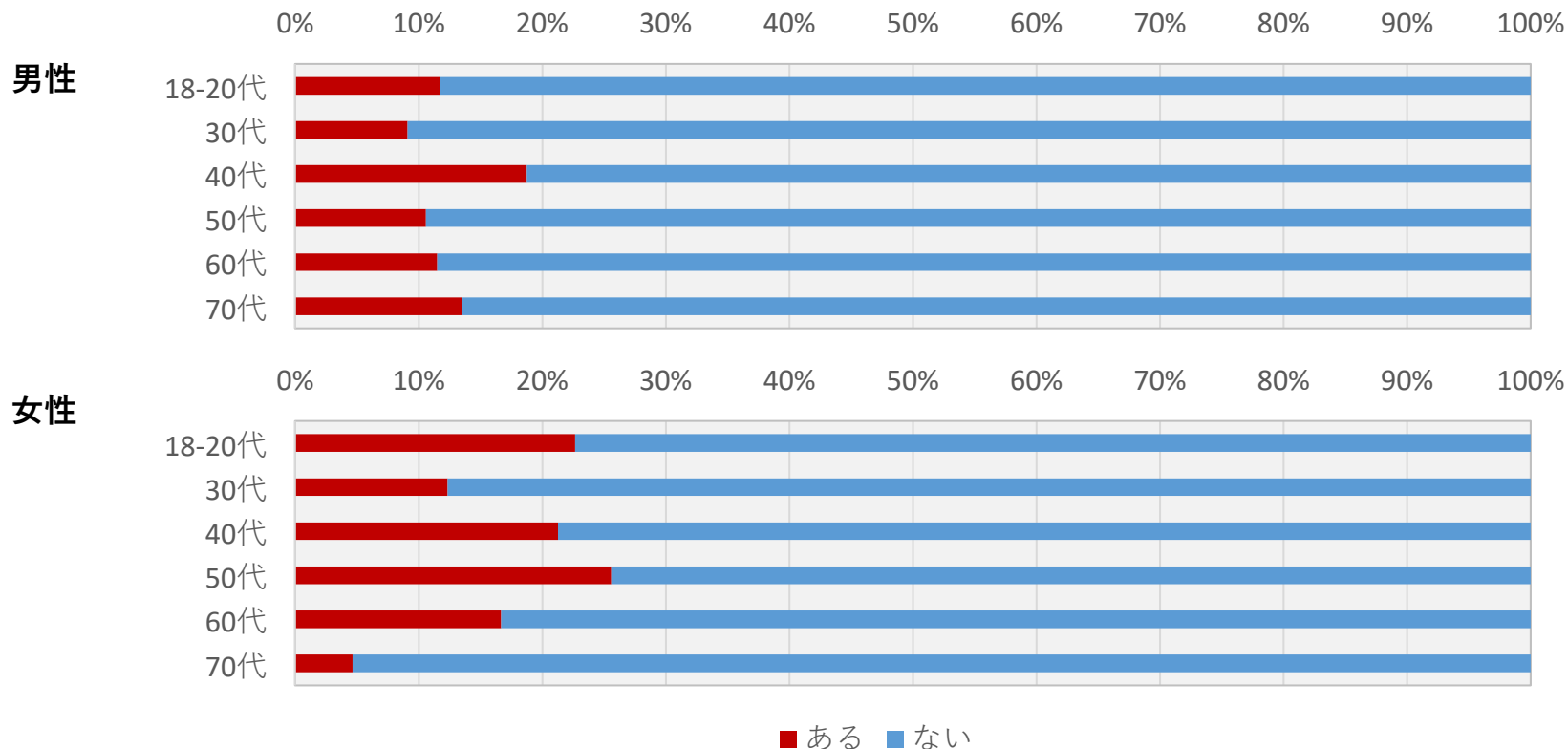
- 年齢が若いことを理由とする不快な経験をした人の割合は、男女で差はなかった。
- 不快経験をした人は、女性は18-20代で多く、60代で少なかったが、男性は年齢による差がなかった。 a) b)

a) 「よくある」「たまにある」を「ある」、「ほとんどない」を「ない」として集計した。

b) 性・年齢別に、経験の有無を従属変数、年代を独立変数とした χ^2 検定および残差分析を行った。

年齢が若くないことを理由とした不快経験（性・年齢別）

年齢が若くないことをバカにされたり、からかわれたりしたことがあるか



- 年齢が若くないことを理由とした不快な経験のある人は、女性の方が多かった。
- 不快な経験のある人は、女性は50代で多く、70代で少なかった、男性は年齢による差がなかった。 a) b)

a) 「よくある」「たまにある」を「ある」、「ほとんどない」を「ない」として集計した。

b) 性・年齢別に、経験の有無を従属変数、年代を独立変数とした χ^2 検定および残差分析を行った。

年齢による差別：まとめ

- 年齢が若いことを理由にした不利な扱い、および、年齢が若くないことを理由にした不快な経験は、女性のほうが男性よりも多く経験していた。
 - 女性において、18-20代の女性が年齢が若いことによる差別や不快な経験を、50代の女性が年齢が若くないことによる差別や不快な経験を多く経験していた
 - いずれの場合でも（年齢が若いことを理由とする場合も、若くないことを理由とする場合も）、女性では回答者の年齢によって経験者の割合に差が見られたが、男性では年齢による差が見られなかった。
- ⇒ 年齢が若い場合でも若くない場合でも、女性のほうが男性より、年齢によって周囲からの扱いが異なることが示された。
- ⇒ 女性に向けられるエイジズム（年齢による偏見）は男性に向けられるものよりも強く、セクシズムとエイジズムの組み合わせさせた「二重の危険」があるという先行研究と一致する（Palmore, 1997; Jyrkinen & McKie, 2012）。

(2) 買い物に対する考え方

買い物に対する志向性の抽出

※ 買い物についての考え方（6点尺度）について探索的因子分析を行い、3因子を抽出した。その際、因子負荷の低い2項目は分析から除外した。

因子分析によって3つの因子を抽出

質問項目	計画志向	挑戦志向	安定志向
どうしても必要なもの以外は買わない	.762	.043	-.227
買物は計画をたててから行なっている	.624	.173	-.071
買物は出来るだけ短時間ですましている	.528	-.124	.133
みかけより実質（中味）を重視して選ぶ	.449	.112	.139
1カ所ですべて買物ができるほうがよい	.381	-.140	.276
新しいお店ができたなら行ってみる	-.058	.733	-.032
新しい商品やかかったものを試しに買ってみるのがよくある	-.101	.638	.062
環境に配慮した商品やサービスを意識して買いたい	.228	.417	.121
いろいろな物を買うより、レジャーや教養にお金を使うほうがよい	.223	.379	.035
なじみのあるブランドの商品を購入する	-.039	-.028	.727
値段が多少高くても有名メーカーのものを買いたい	-.169	.269	.592
買物はいつも決まった店ですることが多い	.279	-.217	.454
同じ買うなら、高くても、長もちするよい品を買う	.113	.200	.452
なるべく多くの人が使っている銘柄のものを選ぶ	.021	.190	.357

※ 全7回の調査データをマージした7000人分のデータを分析

最尤法・プロマックス回転後

買い物に対する志向性の規定要因

※ 買い物についての考え方の3因子の因子得点それぞれを従属変数とした重回帰分析。βが正の場合、独立変数が高いほど志向性が高く、βが負の場合、独立変数が高いほど志向性が低い。

重回帰分析

独立変数	β		
	計画志向	挑戦志向	安定志向
年齢	.052**	.002	.002
性別（男性=1, 女性=2）	.006	.069***	.055***
仕事（している=1, していない=2）	-.109***	.030	-.098***
非正規就業（非正規従業=1, 他=2）	.005	-.002	.022
婚姻状態（結婚している=1, 他=0）	-.056**	.028	-.055**
1人暮らし（1人暮らし=1, 他=0）	-.002	-.014	-.017
学歴	.036*	.048**	.025
収入	-.003	.105***	.126***
昨年と比べた暮らし向きの悪さ	.018	.022	.004
主観的社会経済的地位	-.070***	.095***	-.018
主観的健康状態	.077***	.052***	.051**
メディアへの信頼 ^{a)} : 公的情報	.142***	.101***	.226***
メディアへの信頼 ^{a)} : ネット情報	-.082***	.194***	-.013
R	.204***	.381***	.284***
R ²	.042	.145	.081

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

a) メディアへの信頼の項目を因子分析した変数。添付2参照

※ 全7回の調査データをマージした7000人分のデータを分析

共通する促進要因

- 主観的健康状態が良い人
- 公的情報を信用している人

計画志向の高い人

- 年齢が高い人
- 仕事をしていない人
- 結婚していない人
- 学歴の高い人
- 主観的な社会経済的地位が低い人
- ネット情報への信用が低い人

挑戦志向の高い人

- 女性
- 学歴の高い人
- 収入の高い人
- 社会経済的地位の高い人
- ネット情報への信用が高い人

安定志向の高い人

- 女性
- 仕事をしていない人
- 結婚していない人
- 収入の高い人

買い物に対する志向性と精神的健康の関連

※ 買い物についての考え方の3因子の因子得点それぞれと精神的健康の各尺度の相関

買い物に対する志向性と精神的健康の相関

	抑うつ	不安感	孤独感	人生満足感
計画志向	.007	-.011	.025*	.079***
挑戦志向	-.063***	-.048***	-.113***	.227***
安定志向	-.010	-.002	-.015	.150***

- 3つの志向性全てについて、志向性が高い人ほど人生満足間が高かった。

他に・・・

- 計画志向が高い人は、孤独感が高かった。
- 挑戦志向が高い人は、抑うつ・不安感・孤独感が低かった。
⇒ 挑戦志向が精神的健康状態の良さと最も関連していると言える。

※ 全7回の調査データをマージした7000人分のデータを分析

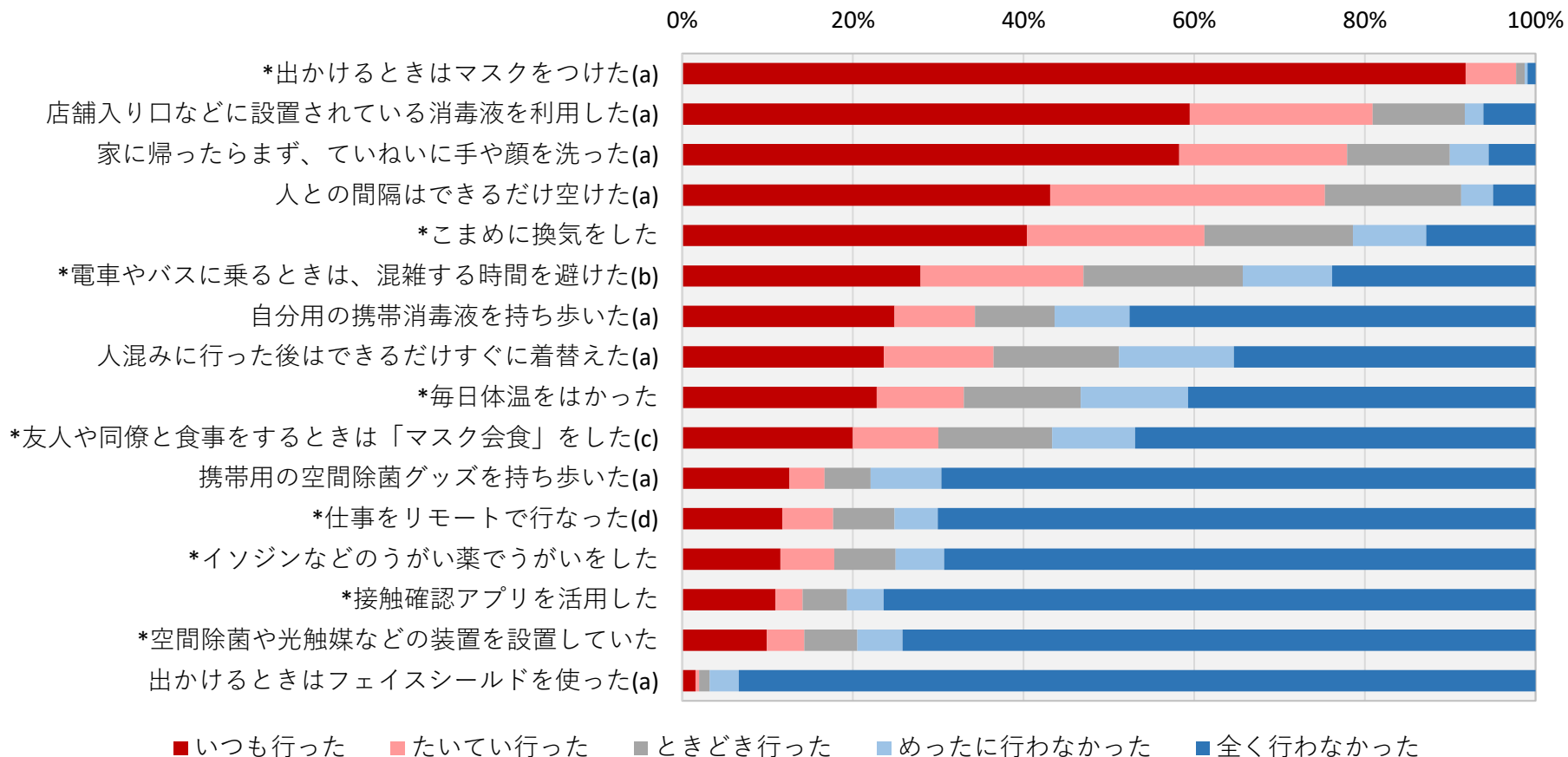
買い物に対する志向性：まとめ

- 買い物に対する志向性として、必要なものだけを計画的に購入する「計画志向」、新規の店や商品に挑戦する「挑戦志向」、なじみのあるブランドや有名メーカーのものを購入する「安定志向」の3因子が抽出された。
- 計画志向が高いのは、年齢が高い人・仕事をしていない人・結婚していない人・学歴の高い人・主観的な社会経済的地位が低い人・ネット情報への信用が低い人・孤独感の高い人であった。
 - ⇒ 比較的高齢でネットを信用していない人や、自分を貧しいと感じている人が、計画的に買い物をする傾向があると言える。
- 挑戦志向が高いのは、女性・学歴の高い人・収入の高い人・社会経済的地位の高い人・ネット情報への信用が高い人・精神的状態が全般的に良い人であった。
 - ⇒ 学歴や収入の高い、経済的・精神的に余裕のある女性が、ネットの口コミ等を参考に、新しい店や商品に挑戦していると言える。
- 安定志向が高いのは、女性・仕事をしていない人・結婚していない人・収入の高い人であった。
 - ⇒ 主婦の女性や収入の高い人がブランドや「いつもの店」を重視した買い物をしていると言える。

引用文献

- Igarashi, T. (2019). Development of the Japanese version of the Three-Item Loneliness Scale. *BMC Psychology*, 7:20, 1-8.
- Jyrkinen, M., & McKie, L. (2012). Gender, age and ageism: Experiences of women managers in Finland and Scotland. *Work, Employment and Society*, 26(1), 61–77.
- 角野善司 (1995). 人生に対する肯定的評価尺度の作成(1). 日本教育心理学会第37回総会発表論文集, 95.
- 村松公美子 (2014). Patient Health Questionnaire (PHQ-9, PHQ-15) 日本語版および Generalized Anxiety Disorder -7 日本語版 – up to date –. 新潟青陵大学大学院臨床心理学研究, 第7号, 35-39.
- 小塩真司・阿部晋吾・カトローニ ピノ (2012). 日本語版Ten Item Personality Inventory (TIPI-J)作成の試み
パーソナリティ研究, 21, 40-52.
- Palmore, E. B. (1997). Sexism and ageism. In J. M. Coyle (Ed.), *Handbook on women and aging* (pp. 3–13). Westport, CT: Greenwood Press/Greenwood Publishing Group.
- Ueda, M., Nordström, R., Matsubayashi, T (2021). Suicide and mental health during the COVID-19 pandemic in Japan, *Journal of Public Health*, fdab113, <https://doi.org/10.1093/pubmed/fdab113>.

(付録1) コロナ禍のリスク対策：「いつも行った」人の多い順【7月調査の結果】



- 6月の調査との共通項目（*印）について、6月時と比べてリスク対策行動の差はなかった。
- マスク、消毒液の利用、手洗い、人との距離を空ける等の日常的な対策は、8割近くの人が行っていた。一方、接触確認アプリを活用している人はわずか14%であり、フェイスシールドの利用、空間除菌といった効果の疑われる対策に次いで、行っている人が少なかった。

* 6月調査との共通項目; (a)外出していない人を除いた割合; (b)電車やバスを利用していない人を除いた割合; (c)他人と一緒に食事をしていない人を除いた割合; (d)仕事をしていない人を除いた割合

(付録2) メディアに対する信用

※ 各メディアへの信用度（5点尺度）について探索的因子分析を行い、2因子を抽出した。

因子分析によって2つの因子を抽出

	公的情報への信用	ネット情報への信用
新聞	.923	-.225
自治体からの情報	.818	-.125
テレビ番組	.775	.046
ニュースサイト	.712	.100
企業からの情報	.703	.093
有識者からの情報	.682	.079
テレビCM	.665	.178
友人・知人からの情報	.384	.256
SNS	-.112	.874
インターネット上の口コミやコメント	-.038	.825
インターネット動画広告	.203	.587

最尤法・プロマックス回転後

⇒ 新聞、テレビ、自治体からの情報への信頼度を表す「公的情報への信用」因子とSNSやネット上の口コミへの信頼度を表す「ネットへの信用」因子が抽出された

分析・資料作成：竹内真純